

SONIC CITY

SONIC CITY

2021 SERIES

6:00pm, March 19th (FRI),
2021 at Sonic City

124

ソニックシティ 2021 シリーズ 第 124 回さいたま定期演奏会

2021年 3月19日(金) 午後6時開演 / ソニックシティ 大ホール

第 124 回さいたま定期演奏会 日本フィルハーモニー交響楽団

ドヴォルザーク

チェロ協奏曲 短調 op.104

Antonín DVOŘÁK: Concerto for Violoncello and Orchestra in B-minor, op.104

(約42分)

～休憩20分～

ドヴォルザーク

交響曲第9番《新世界より》 短調 op.95

Antonín DVOŘÁK: Symphony No.9 "From the New World" in e-minor, op. 95

(約45分)

指揮：小林研一郎 [日本フィル桂冠名誉指揮者]

Conductor: KOBAYASHI Ken-ichiro, Honorary Conductor Laureate

チェロ：宮田 大

Violoncello: MIYATA Dai

コンサートマスター：田野倉雅秋 [日本フィル・コンサートマスター]

Concertmaster: TANOKURA Masaaki, JPO Concertmaster

主催

公益財団法人埼玉県産業文化センター／さいたま市

公益財団法人日本フィルハーモニー交響楽団

後援

埼玉県／埼玉県教育委員会／さいたま市教育委員会／埼玉県吹奏楽連盟

協賛

FVジャパン株式会社

特別協力

盆栽 清香園



お客様への
お願い

- 携帯電話はマナーモードではなく、必ず電源をお切りください。
また、お手持ちの時計のアラームが鳴らないようご確認ください。
- 手荷物、傘、チラシ類などの物音、話し声などで他のお客様のご迷惑にならないようにご配慮をお願いします。
- 録音、録画、写真撮影はご遠慮ください。また、場内でのご飲食もご遠慮ください。
- 当施設は耐震構造となっております。避難が必要な場合は、係員がご案内いたしますので指示に従ってください。

ゆったりシートで！クラシック♪

「ハッピー♡ジャズヨコス公演」

～お客様同士の距離を十分に確保し、安全・安心なコンサートを目指します～





©山本倫子

指揮：小林研一郎

東京藝術大学作曲科および指揮科卒業。第1回ブダペスト国際指揮者コンクール第1位、特別賞受賞。ハンガリー国立響音楽総監督、日本フィル音楽監督をはじめ、国内外のオーケストラのポジションを歴任。

ハンガリー政府よりリスト記念勲章、ハンガリー文化勲章、星付中十字勲章、ハンガリー文化大使の称号、そして2020年3月には同国で最高位となるハンガリー国大十字功労勲章を、国内では2011年文化庁長官表彰を受け、2013年秋の叙勲では旭日中綬章が授与された。2005年からは社会貢献を目的とした「コバケンとその仲間たちオーケストラ」で活動趣旨に賛同するプロ、アマチュア、学生などのボランティアメンバーと共に全国でチャリティ公演も行っている。現在、日本フィル桂

冠名誉指揮者、ハンガリー国立フィルおよび名古屋フィルの桂冠指揮者、読売日響の特別客演指揮者、群響ミュージック・アドバイザー、九響の名誉客演指揮者、東京藝術大学・リスト音楽院名誉教授、東京文化会館音楽監督、ローム ミュージック ファンデーション評議員などを務める。

オフィシャル・ホームページ：<http://www.it-japan.co.jp/kobaken/>



チェロ：宮田 大

2009年、ロストロポーヴィチ国際チェロコンクールにおいて、日本人として初めて優勝。これまでに参加した全てのコンクールで優勝を果たしている。その圧倒的な演奏は、作曲家や共演者からの支持が厚く、世界的指揮者・小澤征爾にも絶賛され、日本を代表するチェリストとして国際的な活動を繰り広げている。

スイスのジュネーヴ音楽院卒業、ドイツのクロンベルク・アカデミー修了。

チェロを倉田澄子、フランス・ヘルメルソンの各氏に、室内楽を東京クワルテット、原田禎夫、原田幸一郎、加藤知子、今井信子、リチャード・ヤング、ガボール・タカーチ=ナジの各氏に師事する。

マスメディアでも「小澤征爾さんと音楽で語った日~チェリスト・宮田大・25歳~」「らららクラシック」「題名のない音楽会」「徹子の部屋」などへ出演している。

録音活動も活発で、最新アルバムは2020年12月23日にリリースされたギタリスト・大萩康司との初のデュオアルバム「Travelogue」。2019年にトーマス・ダウスゴー指揮、BBCスコッティッシュ交響楽団との共演による「エルガー：チェロ協奏曲」をリリース。（日本コロムビア）

近年は国際コンクールでの審査員や、2019年ロームミュージックセミナーの講師を務めるなど、若手の育成にも力を入れている。

使用楽器は、上野製薬株式会社より貸与された1698年製A. ストラディヴァリウス“Cholmondeley”である。

ドヴォルザーク：チェロ協奏曲 短調 op.104

現在でこそ「チェコの音楽家」と言われているドヴォルザーク（1841 - 1904）。だが当時のチェコは、ハプスブルク家の支配するオーストリアの一部だった。しかも当のオーストリアの支配から脱しようという、民族運動が盛んになっていた。

こうした状況の下、ドヴォルザーク自身、オーストリアと密接なつながりを持つ一方で、「オーストリアに齒向かうチェコ人」と度々見なされ、徐々に迫害を受けるようになってゆく。そんな最中の1892年、ドヴォルザークは渡米した。まだ新興国だったアメリカはニューヨークの音楽院院長職を打診され、迷った挙句にそれを引き受けたのだった。

そのアメリカ滞在中の1894年から95年にかけて書かれたのが、『チェロ協奏曲』。当時のドヴォルザークは重度のホームシックにかかっており、ついにはチェコへ最終的に引き上げるほどの事態になった。さらに義理の姉…ドヴォルザークは若き日に、彼女に想いを寄せていたこともある…が重篤に陥り、彼の帰国直後に亡くなってしまうという出来事も重なる。

このように考えると、よく分かるだろう。第1楽章の第2主題のメロディが、なぜそこまでやるせないのか。安らぎに満ちているはずの第2楽章の中間部に、なぜ突然ほの暗いテーマが現れるのか。（なおこのテーマは、義理の姉が愛した歌曲『一人にさせて』に基づいている。）果せるかな、義姉の死後、ドヴォルザークは第3楽章の最終部分を大幅に拡大した。そして第1楽章が回想され、続いて件の歌曲の旋律が再び現れるような改訂をおこなった。

ドヴォルザーク：交響曲第9番《新世界より》 木短調 op.95

アメリカに渡ったドヴォルザークは、最終的にホームシックにかかったものの、逆に彼の地に滞在することで、それまで知らなかった新たな音楽に次々と出会う。しかもその一方で、新大陸からはるか彼方に仰ぎ見る祖国は、依然としてオーストリアの支配の下に置かれている…。

このような葛藤の狭間で1893年に完成されたのが、交響曲第9番《新世界より》。アメリカという新世界で得た未体験の音楽文化を下敷きにしながらも、懐かしいヨーロッパ、ひいてはチェコに寄せ続けた、彼の痛切な思いの結晶に他ならない。何よりもタイトルが《新世界》にあらず、《新世界より》となっているのが、その証拠である。

つまり、ドヴォルザークがこの作品に込めたメッセージとは、単にアメリカ音楽との新鮮な出会いを嬉々として取り入れました、というようなものではなかった。むしろ。そうした経験を踏まえつつ、彼のルーツであるヨーロッパ…その1つの表れが「交響曲」というフォーマットである…への、憂いに満ちた眼差しだったのである。

郷愁に溢れた第2楽章の有名なテーマをはじめ、随所に幻のように現れる儚く幸せな楽想。そして第4楽章では、強奏のかわりに、長く引き伸ばされた和音が静かに消えてゆくという異例の終結部。それは、チェコというヨーロッパの周辺部と、アメリカという世界の周辺部の文化を織り交ぜつつ、音楽を通じてこれまでの世界に新たな風穴を開ける動きでもあったろう。果せるかな帰国後のドヴォルザークは、殊オーケストラ作品では、もはや交響曲を手がけることなく、交響詩という新たなジャンルへと踏み出してゆくのである。

新機軸の演奏会から考える オーケストラの歴史④



舞台上で名人芸を披露するヴァイオリン奏者。伴奏者が舞台の下にいる点が、現在とは異なる。[独奏協奏曲]でも、この伴奏者のように、オーケストラが舞台の下に陣取ることは珍しくなかった。

「協奏曲」というと、本日演奏される『チェロ協奏曲』のように、オーケストラをバックに独奏者が卓越した音楽性や演奏技術を披露する…というスタイルが一般的だ。ただし、前回の日本フィルハーモニー交響楽団さいたま定期演奏会で取り上げられたヴィヴァルディの『四季』はどうだったか？もちろん独奏者による聞かせどころは多々あるものの、オーケストラのパートと一緒に弾いたり、オーケストラの奏者が独奏を披露したりする箇所もある。

つまり主に18世紀前半までは、こうした協奏曲のあり方が一般的だった。例えるならば、ジャズ・バンドの演奏の要所要所で個々の演奏家が独奏を聴かせる、といった光景に近いかもしれない。クラシック音楽のジャンルでいえば、「合奏協奏曲」や「協奏交響曲」といったものが、これにあたる。

この流れが徐々に変わっていったのが、18世紀後半。現在お馴染みの協奏曲、つまり「独奏協奏曲」が主流になってゆく。当時は、身分を問わず個人の才能や価値を認める近代社会が、まさに誕生しようかという頃である。そこで優れた音楽家の中でも、特に大きな才能を具えた音楽家へ脚光を当てるようなスタイルの協奏曲が、もてはやされ始めた。

ちなみに現在、協奏曲が演奏される場合は、独奏者が舞台の一番、その後ろにオーケストラといった形が一般的。ただし19世紀前半の「独奏協奏曲」では、より独奏者をフィーチャーするスタイルが主流だった。何しろ舞台の上には独奏者1人、オーケストラは舞台の下、さらにはオーケストラ・ピットで演奏するという光景が、けっして珍しくなかったからである。

それというのも、コンサート専用のホールというものがほとんど存在せず、劇場を借りて演奏会が開かれるのが普通だったから。劇場でのオーケストラの定位置とはいえば、オーケストラ・ピットに他ならない。それでもやがて、独奏楽器とオーケストラが複雑に絡まり合うような協奏曲が書かれてゆくにつけ、こうした形での上演は難しくなった。そして演奏の際にも、独奏者とオーケストラとの緊密な位置関係が育まれるような配置が試行錯誤の末生み出され、現在にまで至っている。

盆栽清香園より第124回定期演奏会に寄せて

この度は、第124回さいたま定期演奏会の開催、誠におめでとうございます。

春本番、木々の芽吹きが生命の躍動感を伝える頃となりました。眠りの冬の後に、木々が一気に蓄えた力を発揮する様子は、どこか音楽的な表現にも通じるものでしょう。

今回は、生命力の象徴である白玉椿（しらたまつばき）の盆栽を展示させていただきます。推定樹齢100年の白玉椿の盆栽です。白玉椿は丸く咲き始める椿の一種で、茶席の花として親しまれてきました。盆栽も音楽同様、人の営みと共に手から手に渡されて、磨かれる緑の芸術です。作曲家ドヴォルザークが思春期を迎える頃、私共清香園は幕末江戸の地にて創業しました。国は違えど、激動の時代を迎える人々に音楽や緑の癒しが求められたことでしょう。

本日は美しい日本フィルハーモニー交響楽団の音色と共に、1800年代後半の時代にも思いを馳せながら、音楽と盆栽のハーモニーをお楽しみいただけましたら幸いに存じます。

清香園 山田寅幸





清香園 history

江戸末期、庶民の文化としての園芸が花開いた時代、初代庄之助が現在の台東区根岸のあたりに創業いたしました。

清香園の屋号の由来は、梅の盆栽を多く手がけていたことから「清く香る園」といたしました。

二代目初五郎は、薄鉢で竹の盆栽を作ることを得意とし、三代目釜次郎は石付き盆栽を得意としました。この釜次郎の代で太平洋戦争の戦災を逃れて大宮の盆栽村に移住。現在は、四代目の登美男が園主で、盆栽種全般を扱っております。さいたま市北区の盆栽町（通称盆栽村）には毎日、海外からのお客様が訪れています。

お客様に一番身近な「窓口」としての 専門店を目指して

盆栽園という枠組みに捉われず、
お客様に寄り添う専門店を実現していきます。



次回公演のご案内

ソニックシティ 2021 シリーズ

第 125 回さいたま定期演奏会

『教科書に載っている クラシックの名曲たち』

2021 年 5 月 14 日(金)

午後 7 時開演

指揮：西本智実

管弦楽：日本フィルハーモニー交響楽団

曲 目：ビゼー：「アルルの女」より「ファランドール」

ブラームス：ハンガリー舞曲第 5 番

エルガー：威風堂々第一番

チャイコフスキー：交響曲第 4 番第 4 楽章



©塩澤秀樹

第 126 回さいたま定期演奏会

2021 年 7 月 2 日(金)

午後 7 時開演

指揮：広上淳一

管弦楽：日本フィルハーモニー交響楽団

曲 目：ベートーヴェン：交響曲第 6 番「田園」

交響曲第 5 番「運命」



©Masaaki Tomitori

※上記 2 公演の開催会場はソニックシティです。

※ 2505 席のところ、1211 席にてご用意しております。

【ソニックシティホール棟改修について】

ソニックシティホール棟は、令和 3 年(2021 年)7 月 3 日から令和 5 年(2023 年)2 月 3 日(予定)まで大規模改修のため休館いたします。そのため、9 月の第 127 回定期演奏会より埼玉会館大ホールにて開催します。詳細情報については、ソニックシティHPをご覧ください。